

〔翻訳〕

61

## 周代の均斉思想と救済制度(上)

趙 世 超  
高 橋 庸 一 郎(訳)

階級社会は不平等不均等であることがその特徴である。ところが周代に於ては均斉思想とそれに相応した救済制度が存在したのである。本稿は、この一見矛盾する現象に分析を加え、中国古代の早期文明の豊富な内容を更に一步すすめて認識しようとするものである。

### 一. 均斉思想

『尚書・康王之誥』に、「昔君文武、丕とがいに富を平らにし、咎めるに務めず、斉なるに底至し、信にして用って天下に昭明す」<sup>1)</sup>とある。曾運乾の『尚書正詁』は、この一節の字句は、「文武政を為すに、貧富の差を等しくし、寛猛の宜を協せ、中に至るに於て止むを言う」<sup>2)</sup>と指摘している。非常にはっきりしていることは、貧富の差がはげしく度を越すのを防止する為に、ある程度において均斉を求める、すなわちこれが周初の政治的指導思想であったということである。これは拡大して解釈すれば、実はこれがやはり古代貴族の共同の認識であったと見ることが出来る。箕子は、洪範九疇<sup>3)</sup>を献した時、武王に必ず「<sup>4)</sup>無虐癡独にして高明を畏れ」る人をすすんで用いることを提言したが、残念なことに、この殷の伝統は周後期の「逸王」<sup>5)</sup>によって捨て去られてしまった。殷王朝が結局は滅亡への道をたどったということは、当時の思想界に驚きと動揺を、肯定的に引き起こしたことによって、周の文王は、「徳を明かにし、罰を慎しみ、敢えて鰥寡を侮どら」<sup>6)</sup>ず、周公は『無逸』<sup>7)</sup>を作って成王を誡め、先づ殷の先哲の王、中宗、高宗、祖甲が、「敢えて寧やすを荒さず」<sup>8)</sup>、「爰こゝに小

人の依るところを知り、能く保ちて庶民を恵み、敢えて鰥寡を侮らざる」<sup>9)</sup>善政を列挙して、ついで成王に、太王・王季・文王の遺訓の「懷いて小民を保ち、鰥寡を恵ましむ」<sup>10)</sup>を守らせようとしているのであるが、このことから周初の政治家は「有殷に鑑み」て、つとめてその弊害ある点を改めるよう極めて大いなる努力をしたことが解る。西周後期に至って、「厲始めて典を改め、そこではじめて「專利(利を専らとする)」政策が生まれたのであるが、結果としては、やはり「邦人、正人、師氏人」<sup>11)</sup>の全面的な反対に会い、そのうえ厲王は迫られて僭に逃亡したのである。貴族の芮良夫は、「專利」政策を批判して、「夫れ利は、百物の生ずる所なり、天地の載す所なり、而るに或之を専もつぱにせば、其の害多し、天地の百物は、皆將に焉こゝに取る、胡ぞ専なんにすべきや……夫れ王人たる者は、將に利を導いて之を上下に布く者なり、神人を使って百物の其の極なるを得ざらんことを無からしめ……匹夫利を専なんにすれば、猶之を盗と謂い、王にして之を行えば、其の帰するは鮮なり」<sup>12)</sup>と述べている。芮良夫は、一切の物質的富の獲得はすべて自然の力の作用であると見なし、固より労働が富を創造するということを否定するという弊害をもっている。しかしかえってこの事は、西周の均斉思想に対しては、古代の認識水準の理論的な解説を行っているのである。

しかし「経済活動は自己に替って道を開くもの」<sup>13)</sup>であり、私有制度は、確立したかぎりは、一日も停止することなく、継続増長していくのである。均制を強調した西周王朝が終ると、それにとって代ったのは、ますます不平等と不均

斉を加えた春秋時代であった。一般の国民はすでに「終いに饗<sup>とほ</sup>しく且つ貧<sup>あは</sup>し」いことは、自づから言を待たない。いくつかの代々の名家の一族でさえ、いわゆる「簞<sup>かん</sup>の門 圭<sup>けい</sup>寶<sup>ほう</sup>の人」に変わり果て、ついには「降りて皂隸<sup>そうれい</sup>に在る」人となるものもある。零落した一族と富豪の一族とは、天と地ほどの格差があり、そのありさまは鮮明な対照をなしている。「於我<sup>あに</sup>、夏屋<sup>あや</sup>は渠渠<sup>あや</sup>たり、今や毎食餘<sup>あま</sup>すところ無し、于嗟<sup>ああ</sup>乎<sup>や</sup>、權輿<sup>けんよ</sup>を承<sup>う</sup>けず、於我<sup>あに</sup>、毎食四簋<sup>しき</sup>、今や毎食飽<sup>あ</sup>せず。于嗟<sup>ああ</sup>乎<sup>や</sup>、權輿<sup>けんよ</sup>を承<sup>う</sup>けず」<sup>14)</sup>である。昔にはくらべものにならない今の悲嘆の中で、富豪の者に対する批難と攻撃は徐々に政治思想界の輿論の中心となっていくのである。斉の慶封は財産家で、その車は「美澤なること、以て鑑<sup>かん</sup>とす可し」<sup>15)</sup>であったが、展莊叔は、慶封の「車、甚だ澤なれば、人必ず卒<sup>す</sup>ならん」と言ったという。楚の令尹子常は、「聚<sup>あひ</sup>を蓄<sup>たくわ</sup>し実<sup>み</sup>を積<sup>た</sup>む」<sup>16)</sup>ことに熱心で、当時の人はそれを批判して、「餓<sup>う</sup>えたる豺狼<sup>さいろう</sup>」と言ったという。また魯叔の孫宣子、東門子の家はともにぜいたくであった。劉康公はそれを、「若し家亡びざれば、身必ず免<sup>まぬ</sup>がれず」<sup>17)</sup>と言ったという。また晋国の欒桓子は、「驕<sup>おご</sup>泰奢侈<sup>たいせき</sup>にして、貪<sup>むさぼ</sup>りて藝<sup>ぎ</sup>なからんことを欲<sup>ほ</sup>し、略<sup>はか</sup>りて則<sup>すなは</sup>ち志<sup>し</sup>を行い、假貸<sup>かりか</sup>して賄<sup>こま</sup>を居<sup>ゐ</sup>し」<sup>18)</sup>たのであった。叔向は欒氏は、「宜<sup>あた</sup>しく難<sup>がた</sup>に及<sup>およ</sup>ぶ可し」と思った。しかし卻昭子は、「其の富の半は公室、其の家の半は三軍、其の富寵<sup>たの</sup>を待<sup>まち</sup>むも、以て国に泰<sup>やす</sup>んず」であったが、しかし結局は諸卿からは受け入れられず、「其の身は朝に尸<sup>しかばね</sup>となり、其の家は絳<sup>あか</sup>に滅<sup>め</sup>びたのである。これはまさしく、春秋期の人々が一般的には、あまりの豊豪に対しては、排斥の態度を維持していたということによるのである。また、「季氏、周公より富む」に到った時、冉求は、「之が為に聚斂<sup>あひ</sup>し、之に附益<sup>ふえき</sup>」<sup>19)</sup>し、孔子は当然弟子達に呼びかけて、「鼓鳴らして之を攻め」たのである。

富と侈に相対するのは貧と儉である。貧ではあるけれどもよく儉約する家を公表して称讃するのは、富豪のものを批判攻撃する一つの手段である。楚の国の鬬子文は、「三たび令尹を

去れど一日の積無<sup>うれう</sup>し」<sup>20)</sup>であった。これは「民を恤<sup>うれ</sup>る」模範とみなされ、楚の莊王が若敖氏を滅ぼすに至っても、なお子文の徳をおもって、その後継者を存続させ、子孫<sup>こく</sup>郎<sup>らう</sup>に處<sup>あ</sup>らしめ、代々「良臣」としたのである。魯の季文子は卒して、「宰<sup>さ</sup>は家器<sup>け</sup>を庇<sup>おほ</sup>え、葬備<sup>そう</sup>と為すに、帛<sup>もく</sup>を衣<sup>き</sup>る妾無<sup>な</sup>く、粟<sup>あは</sup>を食<sup>く</sup>する馬無<sup>な</sup>く、金玉<sup>きんぎょ</sup>を蔵<sup>くら</sup>する無<sup>な</sup>く、器備<sup>き</sup>を重<sup>おも</sup>ずる無<sup>な</sup>し」<sup>21)</sup>であった。当時の人々はそれを忠義であり、儉約であるとしたのである。君子は論評して、「三君に相たりて、私積無<sup>な</sup>きは、忠と謂<sup>い</sup>わざる可<sup>べ</sup>きか」と言っている。晋国の欒武子は、「一卒の田無<sup>な</sup>く、其の宮は其の宗器<sup>そうき</sup>を備<sup>そな</sup>えず」<sup>22)</sup>であったが、そのことがかえって「諸侯をして之に親<sup>か</sup>しませ、戎狄<sup>じゆうてき</sup>をして之を懷<sup>か</sup>わしめ」たのである。叔向はそれを口を極めて称讃し、あわせて当時の執政韓宣子に、欒武子に学ぶよう要求して、ただ欒武子の貧<sup>ひ</sup>がありさえすれば、それは非常に慶賀に値することである、と述べている。生前の季文子については、仲孫它がかつて、季文子は儉約にすぎて、けちんばに近く、国の尊嚴をきづつけるものだと評したことがあった。ところが、それがかえって父親の孟献子に知れて、結局仲孫它はつかまえられて七日間監禁されたのである。このことがあってからは、仲孫它も儉約にすぎた生活に学んで、家では「妾の衣は七升をこえない布を使い、飼馬飼料の贈答には狼尾草や狗尾草以上のものは使<sup>つか</sup>わない」<sup>23)</sup>のであった。季文子は仲孫它のそうしたことを理解して、その後ほめて、「過<sup>あや</sup>ちて、能く改<sup>あら</sup>むる者は、民の上なり」といい、大夫に上げたのである。

それでは人々は何故に、上述のように儉約を尚<sup>たも</sup>び、奢侈<sup>せきぎ</sup>を目のかたきにするのであろうか。我々はもう一度、前に掲げた劉康公の話を見てみよう。周の定王八年、劉康公を魯につかわせて、錢幣<sup>せんぺい</sup>を大夫におくらせた季文子、孟献子はみな儉約家であった。しかし叔孫宣子と東門子の家はともにぜいたくな暮らしぶりであった。劉康公が帰ってくると、王は魯の大夫のうちどの大夫が賢であるかをたずねた。劉康公は答えて次のように言った。「季、孟は長じて魯に處

するか、叔孫、東門は其の亡なるか、若し家亡びざれば、身必ず免かれず、……今夫の二子は儉、其の能く用いるに足るなり、用いて足れば則ち族以て庇う可し、二子は侈、侈なれば則ち匱を恤えず、匱にして恤えざれば、憂必ず之に及ぶ<sup>24)</sup>と。儉約を心がける者は、十分に財をもって一族のために心配する余裕がある。しかし贅沢を追い求める者は一族の中の貧しい者を顧ることが出来ない。もともと節約を提唱することと贅沢に反対することは、結局同じ効果をもたらすものであり、すべて貴族が収族<sup>25)</sup>の責任を要求され、それによって一族が分裂して瓦解するのを防止するのである。春秋時代では、家族はやはり貴族が保持している政治的地位に依存しており、故にこの種の輿論を作っていく最終目的は、貴族が族党の支持を失って滅亡の災難におちいるのをさけようとするのである。それは当然統治するものの為の考えであって、支配されるものの為の考えではない。よって即ちはっきりした階級性を帯びているのである。しかし貴族の支配を擁護する道は、一族をまとめて貧富の差を大きくしないということを経るならば、難しいことではないから、節約を尚び、贅沢に反対し、一族の団結を提唱し、民をうれうことを内容とする政治的主張は、ちょうど西周の均斉思想の発展と、その延長線上にある。後に孔子は、「君子、急を周うに富を継がず<sup>26)</sup>とまた「寡を患えずして均ならざるを思う<sup>27)</sup>」と言っており、これは春秋期の均斉理論に対する概括と総括であるとみなすことが出来る。

鄭国の賢大夫である孫黒肱は、かつて次のように指摘した。「乱世に生まれて、貴にして能く貧なれば、民これに求むる無く、以て後れて亡ぶ可し<sup>28)</sup>と。能く貧なるとは節約のことである。節約は十分に足る物品は収族と恤民に用いる保証となるものである。この点は支配階級の危急存亡に関わることであり、よってまた高度な倫理にまで昇華されやすいから、貴族のそなうべき道徳的品格と見なされるのである。楚の国の申叔時は、「徳は施恵を以てするなり<sup>29)</sup>

といい、晋国の韓無忌は、「恤民は徳たり<sup>30)</sup>」と言っている。『左伝』昭公十年によれば、斉の樂施と高彊が出奔し、陳と鮑はその室を分けたのであるが、晏嬰はかつて陳の桓子に次のように言った、「必ず諸公に致さん、讓は徳の主なり、讓を懿徳と謂う<sup>31)</sup>」と、ここではまた財を讓るのを最高の美德であると言っている。『国語・晋語（八）』には、叔向が韓宣子を誡しめる言葉を記して、「今吾子に樂武子の貧有り、吾以て能く其の徳を為すなり<sup>32)</sup>」と言っている。これはすでに「能貧」と「能徳」とはすでに同じことであると見なしているということである。

しかし能貧というのは、必ずしも財物があつてはならないというわけではないし、貴族に貧しい生活を送ることを強いるわけでもない。闕子文は、「民多く曠なれば、我富を取るなり、是れ民を勤めしめ以て自から封とするなり、死ぬに日無し、我死逃れるも、富を逃れるに非ざるなり<sup>33)</sup>」といい、また季文子は、「吾れ国人を觀るに、其の父兄の粗を食し、悪しきを衣る者猶多きなり、吾れ是れを以て敢えてせず<sup>34)</sup>」と言っている。彼等のこうした発言は、貴族の心配しているのは、ただ貧富の差が限度を越えて大きくなれば、必ず滅亡を招くにちがいないということであり、その為に、「先づ民を恤えて而して己が富を後にす」と主張するのである。こうした認識から出発して、伍挙はかつて、「民実に背なり、君安ぞ肥なるを得んや<sup>35)</sup>」と言って、よくばりで贅沢な楚の靈王をいさめたことがあった。また孔子は、「百姓足れば、君孰とともに足らざるや、百姓足らざれば、君孰れとともに足らんや<sup>36)</sup>」と言っている。これは恐らく先輩思想家達の啓発をうけたものであろう。

富豪の者は貧乏な者を敢えて顧ようとはしないし、本当に貧しい者は収族、恤民<sup>37)</sup>の条件にも欠乏しているから、いわゆる均斉というのは、各階級間においても完全な均斉を実現しようというのではない。『左伝』襄公二十八年には、晏嬰の言葉を記して、「且つ夫れ富は、布帛の幅有るが如し、之が為に度を制して、遷するこ

と無からしむるなり」<sup>38)</sup>と言っている。貴族の財物は先づ何よりも尊重されなければならないが、ただし一定の制限が必要であり、それがすなわち均斉のカナメというものである。『左伝』襄公二十六年に、鄭伯が、「子産に次路再命の服を賜うに、六邑を先に」<sup>39)</sup>しようとする、子産は辞退して、「臣の位は四に在り……臣敢えて賞礼に及ばず」と言ったとある。また襄公二十七年に、衛の献公が公孫免余に邑六十を与えんとすると、免余は辞退して、「唯だ卿は百邑を備うるのみ、臣六十なれば、下に上禄有るは、乱なり、臣敢えて聞かず」<sup>40)</sup>と言っている。財物の占有の巾を制限するには、貴族の位、等級と等級を規定する特権的な礼によるということがわかる。

西周の均斉はまだ十分には貧富の分化をおさえきれていないし、春秋期においてもまた同じである。そして私有制度が全面的に発展することを特徴とする戦国時代が、結局は到来することとなるのである。春秋期の各派の思想家達は、あるものは新しい統治者の為に、治国、天下平定の方策を案出するのに忙しく、またあるものは新しい時代とギクシャクして受け入れられずに、憤慨の言葉をならべながらも、つねに異った角度から、均斉について論及し、それによってこの思想に更に多くの色どりと形を加えていくのである。

孔子は春秋末期に生き、彼は均斉を仁学の体系に入れ、同時にまた「君子其の親に施さず」<sup>41)</sup>を強調して、事実上血縁宗法関係を基礎として、「親族」から「仁民」に到達することを主張した。戦国期の儒者の言論を記述した『礼記』という書の中では、宗主が、「積みて能く散ずる」<sup>42)</sup>ことを要求しているし、また族人には、「敬しんで宗子、宗婦に事え、富貴といえども、敢えて富貴をもって父兄宗族に加えざること」<sup>43)</sup>を要求している。これ等は、はっきりと家族の成員の間に一種の厳格な等級が存在しているべきこと、また仁愛精神的な人道関係が存在しているべきこと、またその結果として宗族内部の秩序、団結及び互助と協調を恢復することを希望

しているのである。孔子及びその学統の観点は、収族と恤民を核心とする伝統的な均斉思想との間に、はっきりとした発展的脈絡を有らしめることである。

墨子は家族というくびきから脱脚した小生産者の利益を代表し、貴族の「多財なるも貧に分けず」<sup>44)</sup>、下層民はかえって「餓える者は食を得ず、寒き者は衣を得ず、勞する者は息を得ず」を痛感し、あわせて戦争と一切の禍いと混乱を引き起こす根源をとりのぞき、それによって、「互いに愛しみあい、互いに利しあう」ことを治世の特効薬とし、人々に、「人の国を視るに其の国を視るが若くし、人の家を視るに其の家を視るが若くし、人の身を視るに其の身を視るが若くす」<sup>45)</sup>することもよびかけたのであった。その具体的な方法としては、「力有る者は疾く以て人を助け、財有る者は勉めて以て人に分かち、道有る者は人に勸めて教う」<sup>47)</sup>というのである。儒家、墨家ともに人を愛することを提唱するが、しかし儒家の愛には等級による差がある。即ち親族関係によって、近者から遠者へ及ぼしていく愛であるが、墨子はそれを「差別」であるとして退け、「差別されて易きを以て兼ね」なければならないというのである。こうした血縁宗法の基礎を無視して、親疏を分けない兼愛交利の論を強調することは、一般の労働大衆の願望に符合するものではあるが、かえって実際にはそぐわない、ただの理想空想となってしまうことをまぬがれない。

道家学派は一般に私有制に反対し、富を等しくし、貧を救済することを主張する。『老子』の書には多くの戦国時代の観点が記述されていることは、すでに世に広く認められていることである。作者は天道を以て、私有して多くを持つことに反対する根拠とし、富めること、或いは富みながらますます富むことを求めるのは、ともに禍いを招く源であるとみなして、それによって自然の、「減じても余有らば不足を補う」<sup>48)</sup>という自然の法則にしたがうべきことを主張するのである。しかし同時にまた、「聖人は積まざるも、既に以て人に為せば己れ愈有り、

既に以て人に与うれば己れ愈多し」とも言っている。この種の、富を均斉化させようという理論は、やはり富める者の立場に立って、天道を用いて、貴族に警告を発しているものと見ることが出来る。莊周に至っては、彼の追求めるものは一種の、天地の万物と遊ぶという超俗の思想で、形ある物をためこむことに反対し、欲望を否定し、物質財物の作用に目をうばわれることを否定し、「富みて人をして之を分かつしめ」、「四海の内をして共に之を利する、之を悦と謂い、共に之を給する、之を安ずとなす」とも主張するのである。共に利し、共に給するという論理の出発点はもとより消極的なものであるが、一つの理想として、その取るべき所もある。しかし莊周には、「財用いて余あるも則ち其の自りて来る所を知らず、飲食して取りて足るも其の従う所を知らず」<sup>49)</sup>といった類の言論があり、これは聖人は物質の享受を完全に排除放擲出来るわけではなく、ただその来歴を問うことを願ったことはないというのであり、これはつまり、彼の「共に利し、共に給する」というのには、自分は労働せずに、人と共利共給することを要求するということへの厭悪と疑念を帯びているのである。

孟子は儒家として戦国時期の主要な代弁者であり、当然やはり、「人に分つに財を以てす」<sup>50)</sup>ることを通じて恵を施すことを主張するのである。彼は、「狗彘は人の食するを食して撿るを知らず、涂に餓殍有るも発を知らず」<sup>51)</sup>というような統治者に対しては強烈な批判をし、「庖に肥肉有り、廄に肥馬有るも、民に飢色有り、野に餓殍有」らしむるものは、すべて、「獸を率りて人を食す」るものとみなすのである。しかし孟子は私有制がすでに相当発展した現実に鑑みて、更に「制民の恒産」(民に授けた田畑)を利用して、分化を抑止し、人民の流亡をふせぎ、新興の国家の支配の基礎を安定させることを主張したのである。当時制民の産とは、田を授けることであり、孟子はいたる所で百畝の田、五畝の宅の計画を売り込み、滕文公が畢戦に、古代の井田のことをたずねさせた時には、孟子

は自分の歴史に対する粗っぽい理解にもとづいて「八家は皆百畝を私し、<sup>とも</sup>同に公田を養う」という井田制の大略を述べているが、実際上はすべて理想の中の授田の方法であるにすぎない。彼はただ授けられた土地でよく人民を使うことが出来るなら、「仰ぎて以て父母に事うるに足り、俯しては以て妻子を蓄するに足り、樂<sup>も</sup>には身を飽に終え、凶年には死亡を免かれ」、よこしまで贅沢な行為は除去され、人民は使いやすくなると考えたのであった。

『管子』という書物の作者は、「必ず先づ民を富にす」ることを「治国の道」とし、同時にまた、「民富めば則ち禄を以て使うべからざるなり、貧なれば則ち罰を以て威すべからざるなり、法令の行われざるは、万民の不治、貧富の不斉なり」<sup>52)</sup>と指摘し、それによって「斉」を主張し、「貧富に度有り」<sup>53)</sup>を主張し、「貧富度無ければ則ち失う」と考えたのである。これは彼の富民思想とは、一見矛盾するようであるが、実はそうではない。『管子』の富民理論は、「倉廩<sup>あふ</sup>美ちて則ち礼節を知り、衣食足りて則ち榮辱を知る」<sup>54)</sup>という基礎の上になりたっており、民衆に礼節を知らしめ、榮辱を知らしめることを通じて、秩序を擁護し、統治するという目的に到達するのであるが、しかし民は貧しければ上をしのいで禁を犯し、富裕すぎれば禄を利用してカジをとるがむつかしくなり、同様に秩序の安定の統治に、貧富の差は不利なのである。こうして見れば、『管子』という書の中で、民を富ませるということと、あまりの貧困、あまりの富裕の不均衡をなくすということは、まさしく相互に補充しあっているのである。

法家の中の商鞅は国家にして民貧しきを主張した。国家は列国の競争の中で発展を獲得するための必須の条件であり、民貧なら将賞と刑罰を重視することになり、賞罰を通じてその勇敢な戦士をつくることが出来る。この一つの基本的観念から出発して、彼もまた貧富を均衡させることを強調し、「治国の拳は、貧者を富たらしめ、富者を貧たらしむるを貴び、貧者が富み、富者が貧なれば、国強し」<sup>55)</sup>と考えたのである。

しかし彼のいわゆる富というのは、人民を真正銘の富裕で満ち足りた状態にするわけではなく、相互の格差を縮小して、富める者を使いやすく、また貧しき者に活力を与えて、国家が十分な労働力と兵士の補給源を確保出来るように保証するためなのである。

以上述べて来た思想家以外に、農家の許行がおり、彼は、「君民并に耕す」<sup>56)</sup>という論を提示して、「民を厲して以て自から養わしむ」に対しては、きびしい批判的態度をとり、現存する社会的な等級ですら、すべて否定したのであり、均斉を主張する思想家の中でも、最もラディカルな部類に属すると思われる。このような極端な平均主義は実現不可能な素朴な幻想ではあるけれども、しかしかえってそれは小農階層の、現実の抑圧を排除したいという要求を反映しているのである。

しかし荀子や韓非子は、以上のような考えに同調していない。彼等は均斉思想に対して尖鋭的な批判を提示した。それはまさしく伝統的な均斉思想がすでに終末に向いつつあることを暗示していると言えるのである。

## 二. 救済制度

西周から戦国期にかけての均斉思想は、だんだんと理想化されていくような要素を帯びてはきたが、しかしまた一定の信憑性のある事実もある。その中には富者に対する制裁と抑制がふくまれているし、また更に貧者に対する施舍と救済もふくまれている。ここでは主に周代の救済制度を、前項に掲げた均斉思想と関係させながら紹介する。

『礼記・表記』に、「周人礼を尊びて、施を尚ぶ」<sup>57)</sup>とある。詩人は文王を称讃して、「錫を陳き周を載す」<sup>58)</sup>と言っているが、『国語・周語上』の中で芮良夫はかつて此の語をひいて、利を独占することを批判したが、その韋昭の注には、「陳は布くなり、錫は賜なり、文王賜を布いて利を施し、以て載して周道を成すを言うなり」<sup>59)</sup>とある。このことから施予と救済を重視

することは、まさしく文王が周を造るに当たっての秘中の宝刀であったということが解る。

『孟子・梁惠王下』には、「老いて妻無きを鰥と曰い、老いて夫無きを寡と曰い、老いて子無きを独と曰い、幼にして父無きを孤と曰う、此の四者、天下の窮民にして告すること無き者なり、文王政發し仁を施すに、必ず斯の四者を先にす」とある<sup>60)</sup>。実際は、鰥、寡、孤、独はただ窮民という一類の中の、いくつかの典型にすぎないし、彼等が代表するのは、早期の階級的分化の中で、世話をしてくれる家族を失った者である。こうした救済政策は一族の団結の安定に有利であるので、だから、「文王は民力を以て台とし沼とし、民は之を歎樂」し、結局あたかも兄弟や子供が父母に替って仕事をするかのように、みんな骨身を惜しまずせっせと働くのである。そして西伯の「善く老を養う」という美しい名声もまた遠く四方に伝わっていたために、これ等の身寄りを失い、動揺と失意の中に亡然と自失している人々にとっては希望が見出せるようで、そういう人々は続々とやって来て身を寄せ、ある者は臣として服することを意思表示したのである。そこで文王は、「天下を三分して其の二を有<sup>たも</sup>」ち、殷を滅ぼす力もまた急速に大きくなっていったのである。

『呂氏春秋、慎大覽』には、周武王が殷を滅ぼしたあと、即ち、「盤庚の政を復し、巨橋の粟を發し、鹿台の錢を賦し、以て民に私無きを示し、拘を出して罪を救し、財を分ちて責を弃て、以て窮困を振<sup>すく</sup>う」<sup>61)</sup>とある。『国語・周語下』にも、文王が班師にあつて途を羸内にとった時、「憲を布きて百姓に施舍」<sup>62)</sup>したことがあった。これは文王の救済政策の明確な継続であり、かえってすでに殷人と其の他の各族人民に恩沢を及ぼしているのである。「能く保ちて庶民を恵<sup>いつく</sup>しみ、敢えて鰥寡を侮らず」というのは、もともと殷の先哲王の伝統であり、いまそれを復活させ、なりゆきによって歴代の逸王が見すてた殷族の成員を擁護するに到ることとなったのである。周人は迅速に広大な東方を占領し得て、施舍と救済に力を注いだということが出来る。

『荀子・議兵』篇に、「殷の服民の養生する所以の者は周人に異る無し」<sup>63)</sup>とあるが、その中には、当然「再に至り、三に至る」も依然として「我が降爾し命を用いざる」ところの死んでも改めない強硬派はふくまれていないが、しかし必ず多くの服従者が、周人の伝統を受け入れた後、困窮から再生に向ったにちがいない。

西周の日常的な救済はすでに制度化されていた。虢の文公は周の宣王の時の卿士であったが、彼は籍田の生産状況を語った時に、次のように述べている。収穫した食料は、「籍の東南に廩し、鐘めて之を蔵し、時に之を農に布く」と、また「もし、すなはちよく神に媚にして民に和せば、則ち享祀の時至りて優裕を施すなり」<sup>64)</sup>と言っている。鐘とはあつめるの意で、布は鐘とは反対に、分ちて之を散ずと解釈することが出来る。我々の理解にもとづけば、籍田とは国の公田であり、西周時期には、土地は封を通じて賜わり、すでに各個別の大家族によって経営されていたが一部は常に別に保留しておかねばならなかった。天子に供する時と、諸侯が春耕の儀式を行う時に、実際に労働作業を負担するのは各家族からやって来た「庶人」であり、虢文公の話は、籍田からの収入は神を祭るのに用いられ、更にこれを救済に用いたのだということを証明している。このような大家族では、籍田を耕する中で、氏族の共同労働という古い規約を保持することが出来たばかりでなく、その上相互のたすけ合いという作用も起すことが出来たのである。食料を解放する時期は、或いは食料にこと欠く「季春の月」といわれ<sup>65)</sup>、或いは春耕状況をかえり見て、食料の不足を補わねばならない時、また秋の収穫を省て、供給不足を助ける時、とかいわれているが<sup>66)</sup>、いずれにしても一年に二回あったが、しかし『逸周書、桑扈』篇には、「大荒には、用に舍し窮を振い、稟を開いて同に食す」<sup>67)</sup>とある。これにもとづいて推測すれば、何も春や秋にこだわらなかったようで、要するに、もし必要な時には利を散じて、民の困難をすくったのである。多分「時に農を布く」というのが正解なのであろう。

他に、『国語・周語中』の記す所にもとづけば、単襄公が周の定王に向って周制について述べている時に語っているのであるが、各国はみな、「樹を列して以て道を表わし、鄙食を立てて以て路を守」<sup>68)</sup>り、「国に郊牧有らしめ、疆に寓望有らしむべしと。韋昭の解釈によれば、これはつまり辺疆の地に、旅人の為に臨時の宿泊所を建て、国都と地方を往来する時の辺鄙な地域に、十里ごとに一つの建物を設置し、あわせて必要な飲食物の用意をして、旅人が利用出来るよう供給したのである。このような旅人を優待するという措置もまた西周の救済制度の一部であった。

『左伝』襄公二十九年、呉季札が魯で周樂を觀賞した時、その『頌』は歌って次のように言っている。「至なるかな、直にして倨らず、曲にして屈ならず……施して費ならず、取りて貪らず」<sup>69)</sup>と。「取りて貪らず」というのは、搾取にも節度がそなわっているということを言っているのである。それでは、周王は人に恵を施して、なぜ非常な財政破産に陥らなかったのか。もともと周人の伝統的なやり方は、「<sup>70)</sup>宗工に恵み」、「寡妻に刑して、兄弟に至り、以て家邦を御す」であり、先ず天子が模範を作り出し、それから各級貴族にだんだんと見ならわせるのであり、当時、国の基本的組織単位の主なものは、父権による家長制大家族であったので、ただそれぞれの一族の家長が自分の一族の人々をよく面倒みさえすれば、必ずしも全部王室からまかなわれるという訳ではなかった。よって、西周のような広大な領域での救済は、やはり貴族の一族に対するまとまりを呼びかけるということを通じて実現しなければならなかったのである。『大雅、甫田』に、「<sup>71)</sup>我は其の陳を取り、我が農人に食せしむ」とあり、朱熹『詩集伝』には、「其の新を存して、其の旧を散じ、以て農人に食せしめ、足らざるを補い給せざるを助けるなり」<sup>72)</sup>とある。この詩の作者は一つの収族資本を具有する大家族の家長に属していたはずである。また同じく『大田』の詩には、「彼に獲らざる穧有り、此に斂めざる穧有り、彼に

遺これる秉有り、此に滞こおれる穂有り、伊寡婦の利」とある。これは収族のための一つの特  
殊方法である。陳奐は『詩毛氏伝疏』の中で、  
彼の外舅の無錫の顧廷杏の話を記録している。

「山東省の農家は刈入れの時に必ず畝の一角を  
のこしておき、貧しい家に之を取らせて、その  
家に利をもたらせるのであるが、これはやはり  
古えの遺風であろうか」と。もしそうだとすれ  
ば、西周のこうしたやり方が、遠々と現代にま  
でつたえられてきたということになる。

(以下次号)

### 注

- 1) 「昔君文武丕平富、不務咎、底至齊、信用昭明于天下」(昔の国君文王、武王は、民の富を均等にすることにつとめ、人民の罪を追糾することあまり意を用いず、均等化することに徹底して、用譽をもって政治を行うことを天下に明かにした)
- 2) 「言文武為政、等貧富之差、協寬猛之宜、止於至中」(文王、武王が政治を行う時には、貧富の差を等しくし、寛やかな点とはげしい点とのよい所を取って、中程度に止めたということを言っている)
- 3) 洪範は、尚書の編名でもあり、殷末の箕子が作って、周の武王に提示したとされるもので、天地の大法を述べたもの。また九疇は、禹が天下を治めた九種の大法とされる。尚書の洪範に、「天乃錫禹洪範九疇、彝倫攸叙」とある。
- 4) 「尚書・洪範」に、「無虐鰥獨而畏高明」(残虐でなく孤独で高潔明智なることに畏れを感じる)とある。
- 5) 「逸王」とは他国に出奔した王でここでは厲王や平王を指す。
- 6) 「尚書・康誥」に、「明德慎罰、不取鰥寡」とある。『尚書大伝』に、「恵恤窮貧民、不慢鰥夫寡婦」とあり、『釈名・釈親屬』に、「無妻曰鰥」とある。また『管子・入国』に、「婦人無夫曰寡」とある。
- 7) 『尚書・周書』の篇名。周公が成王に逸楽を戒しめたもの。
- 8) 『尚書・無逸』に、「治民祇懼不敢荒寧」とあり『正義』に、「為政敬身畏懼不敢荒怠自安」とある。
- 9) 『尚書・無逸』に、「爰知小人之依能保惠于庶民不敢侮鰥寡」とあり、『正義』に、「知小人之所依、依仁政故能安順於衆民、不敢侮慢憊獨」とある。
- 10) 『尚書・無逸』に、「徴柔懿恭懷保小民惠鮮鰥寡」とあり、『正義』に、「以美道和民、故民懷之以美政恭民、故民安之、又加惠鮮乏鰥寡之人」とある。
- 11) (著者注)に、「参『置臺』銘文、見『西周金文辭大系』とある。
- 12) 『国語・周語上』に、「夫利、百物之所生也、天地之所載也、而或專之、其害多矣、天地百物、皆將取焉、胡可專也」、「夫王人者、將導利而布之上下者也、使神人百物無不得其極」、「匹夫專利、猶謂之盜、王而行之、其婦鮮矣」(利というものは、百物に生じるものである。地が天の氣を受けて百物が生成するのである。故にそうした利をある者が一人占めにしたならば、孔子が「放於利而行、多怨」と言ったように、害悪が多い。天地が百物を生成させれば、民はみなそれを取って用いるのである。何故にその利を一人占めに出来ようか)、(王たる者は、利を開放して天神、人物に与えなければならぬ。故に神人に利を独占させないで、中程度の所を得させるようにしなければならない)、(凡夫が利を独占したなら、それを盗というのであるが、王がそれを行えば、周に帰属する者は少なくなったであろう)とある。
- 13) (著者注)に「エンゲルス『カール・シュミットへ』、1890年17月27日。『マルクス・エンゲルス書簡選集』人民出版社、470-475ページ、1965年版」とある。
- 14) 『詩經・權輿』に、「於、我乎、夏屋渠渠、今也每食無餘、于嗟乎、不承權輿、於、我乎、每食四簋、今也每食不飽、于嗟乎、不承權輿」とある。程俊英『詩經注析』によると、「この詩は没落した貴族が昔の生活を回想して、自からいたんだ詩である。春秋時代には、田を私有することがだんだんと多くなり、各国も統統と畝田によって税をかけることを実行した。ひの為、領主は没落し、生活は下降していった」とある。「夏屋」は大屋のこと、「權輿」はもと草木の芽の出はじめることを指し、ここでは最初の頃の良き待遇を指す。
- 15) 『左伝・襄公二十八年』に、「美沢可以鑒」(美しく光沢があって鏡のようだ)、「車甚沢、入心瘁、宜其亡也」(車がこんなにピカピカなら、その人はさぞつかれることであろう、きっと亡びるだろう)とある。
- 16) 『国語・楚語下』に、令尹子常「婦以語其弟、曰『楚其亡乎、不然、令尹其不免乎、吾見令尹、令尹問蓄聚積實、如餓豺狼焉、殆必亡者也』」(婦えると弟に語って言った)『楚は亡ぶだろう、もしそうでないなら、令尹はそれをまぬがれることはないであろう。私は令尹に会ったら、彼は蓄財のことを聞いたが、それは飢えた豺狼のようであった。あれでは必ず亡ぶ』とある。
- 17) 『国語・周語中』に、「使劉康公聘於魯、発弊於大夫、季文子、孟獻子皆俊、叔孫宣子、東門子家皆侈、帰、王問魯大夫孰賢、対曰、季、孟其長處魯乎、叔孫、東門其亡乎、若家不亡、身必不免」(劉康公を使として魯に派遣した大夫に錢幣をおくらせた。季文



- 子、孟献子は皆儉約家であったが、叔孫宣子、東門子家は皆奢侈であった。劉康公が帰って来ると、王は魯の大夫の中で誰が賢であるかをたずねた。康公は答えて、「季家と孟家は魯で長く栄えるでしょうが、叔孫と東門は亡びるでしょう。もし家が亡びなくても、その身はまぬがれることはないでしょう」と言った」とある。
- 18) 『国語・晋語八』に、「及桓子驕泰奢侈，貪慾無藝，略則行，假貸居賄，宜及於難，而頼武之德，以没其身」（樂桓子は傲慢で贅沢であり，貪慾さは極まる所がなく，規則を破って，人に財物を貸して蓄財し，難がその身にふりかかるに及んで，武の德を頼みとしたが，結局は其の身は亡んだのである）とある。また，「夫卻昭子，其富半公室，其家半三軍，恃其富寵，以泰于国，其身尸於朝，其宗滅於絳」（卻昭子は，其の富は公室の半分に当り，その軍隊は三軍の半分にも及ぶものであり，その富と寵愛をたのみとして，国に悠然奢侈で安泰であったが，結局はその身は朝に屍となり，その本家は絳で滅亡したのであった）とある。
- 19) 『論語・先進』に「季氏富于周公，而求也為之聚斂而附益之，子曰，非吾徒也小子鳴鼓而攻可也」（季氏は天子の宰卿士である周公より富んでいた，しかし冉求は季氏の為に重税を賦して季氏の為に利をはかった，孔子は言った。彼は私の弟子ではない。皆んな鼓を鳴して警告し，それでもきかなければ攻めてもいいくらいだ）とある。
- 20) 『国語・楚語下』に，「昔闕子文三舍令尹，無一日之積，恤民之故也」（昔し闕子文は三回も令尹の位についたが，一日のたくわえもなかった。民のことを心配しての故であった）とある。
- 21) 『左伝・襄公五年』に「季文子卒，大夫入斂，公在位，宰庀家器為葬備，無衣帛之妾，無食粟之馬，無藏金玉，無重器備」（季文子が死に，大夫は賦をおさめ，公は阼階の西郷に在った。宰具・家器で葬式の準備をしたが，季文子の家には絹の衣をきる女性はおらず，粟を食う馬もいなかった。また金玉のたくわえもなく，また珍宝甲兵のものもなかった）とある。
- 22) 『国語・晋語八』に，「昔樂武子無一卒之田，其宮不備其宗器」（昔し樂武子は百頃の田もなく，その宮室には宗主としての祭具のそなえもなかった）とある。
- 23) 『国語・魯語上』に，「文子以告孟献子，献子囚之七日，自是，子服之妾衣不過七升之布，馬飭不過稂莠。文子聞之，曰，過而能改者，民之上也，使為上大夫」とある。
- 24) 注(17)参照。「侈則不恤匱」とは，（奢侈な生活をしていると他人の窮乏をうれうことがない）の意味
- 25) 「収族」の語は，「一族をまとめる」の意味で以後，訳文にもこの語をそのまま使用する。
- 26) 『論語・雍也』に，「君子周急不繼富」とあり正義に，「賑窮，周急」「君子當周救人之窮急，不繼接於富」とある。
- 27) 『論語・季氏』に，「丘也聞有国有家者不患寡而患不均」とある。『正義』に，「孔曰，国語侯家卿大夫，不患土地人民之寡少患政，理之不均，平」とある。
- 28) 『左伝・襄公二十二年』に，「生于乱世，貴而能貧，民無求焉，可以後亡」（乱世に生れて，貴にして能く貧であれば，民は何も求めることはなく，亡びることはない）
- 29) 『左伝・成公十六年』に，「德以施惠」とある。
- 30) 『左伝・襄公七年』に，「恤民為德」とある。
- 31) 「晏子謂桓子，必致諸公，讓，德之主也，讓之謂懿德」とある。
- 32) 「今吾子有樂武子之貧，吾以為能其德矣，是以賀」（今あなたには樂武子の貧がある。その德を実行することが出来る。これはめでたいことである）とある。
- 33) 『国語・楚語下』に「民多曠者，而我取富焉，是勤民以自封也，死無日矣，私逃死，非逃富也」（民は多く空しくあるならば，私は富を取ろう，これは民を労働にいそまして自分で裕福にならせるのである。私は死の日までもう長くはない。私は死から逃れるのであって，貧富は問題ではない）とある。
- 34) 『国語・魯語上』に，「吾觀国人，其父兄之食粗而衣惡者猶多矣，吾是以不敢」とある。
- 35) 『国語・楚語上』に，「民實膏矣，君安得肥」とある。
- 36) 『論語・顔淵』に，「百姓足君孰與不足，百姓不足君孰與足」『正義』に，「孰誰也」「若依通法而稅則百姓家給人足，百姓既足，上命有求則供，故曰，君孰與不足也，今君重斂民則困窮，上命所須無以供給，故曰，百姓不足君孰與足也」とある。
- 37) 「恤民」民をうれうこと，以後訳文にはこの語をこのまま用いる。
- 38) 「且夫富如布帛之有幅焉，為之制度，使無遷也」とある。
- 39) 「賜子產次路，再命之服，先六邑，子產辭邑，曰，自上以下，降殺以兩，礼也，臣之位在西，且子展之功也，臣不敢及賞礼，請辭邑」とあり，『集解』に，「先路，次路，皆王所賜車之綵名」とあり，また「以路及命服為邑先，八邑，三十二井」とある。
- 40) 「公与免余邑六十，辞曰，唯卿備百邑，臣六十矣，下有上禄，乱也，臣弗敢聞，且甯子唯多邑，故死，臣惧死之速及也」とあり，集解に，「此一乘之邑，非四井之邑」とある。
- 41) 『論語・微子』に，「君子不施其親」とある。
- 42) 『曲礼上』に，「積而能散」とある。

- 43) 『内則』に、「敬事宗子，宗婦」「不敢以富貴加于父兄宗族」とある。
- 44) 『墨子・魯問』に、「多財而不以分貧」とある。
- 45) 『墨子・非樂上』に、「飢者不得食，寒者不得衣，勞者不得息」とある。
- 46) 『墨子・兼愛中』に、「視人之国若視其国，視人之家若視其家，視人之身若視其身」とある。
- 47) 『墨子・尚賢下』に、「有力者疾以助人，有財者勉以分人，有道者勸人以教人」とある。
- 48) 『老子』第七十七，八十一章に、「損有余而補不足」「聖人不積，既以為人已愈有，既以与人己愈多」とある。
- 49) 『莊子・天地』に、「財用有余則不知其所自来，飲食取足而不知其所從」とある。
- 50) 『孟子・滕公文上』に、「分人以財」とある。
- 51) 『孟子・梁惠王上』に、「狗彘食人食而不知檢，塗有餓殍而不知發」「庖有肥肉，厩有肥馬，民有飢色，野有餓殍」「率獸而食人」とある。
- 52) 『管子・國蓄』に、「民富則不可以祿使也，貧則不可以罰威也，法令之不行，萬民之不治，貧富之不齊也」とある。
- 53) 『管子・五輔』に、「貧富有度」「貧富無度則失」とある。
- 54) 『管子・牧民』に、「倉廩實則知礼節，衣食足則知榮辱」とある。
- 55) 『商君書・税民』に、「治國之舉，貴令貧者富富者貧，貧者富富者貧，國強」とある。
- 56) 『孟子，滕文公上』に，許行の説が見える。『君民并耕』『厲民而以自養』などの句が見える。
- 57) 「周人 尊礼而尚施」とある。
- 58) 『詩經・文王』に，「陳錫載周」とある。
- 59) 「陳，布也，錫，賜也，言文王布賜施利，以載成周道也」とある。
- 60) 「老而無妻曰鰥，老而無夫曰寡，老而無子曰独，幼而無父曰孤，此四者，天下之窮民而無告者，文王發政施仁，必先斯四者」とある。
- 61) 「復盤庚之政，發巨橋之粟，賦鹿台之錢，以示民無私，出拘救罪，分財弃責，以振窮困」とある。
- 62) 「布憲施舍於百姓」とある。
- 63) 「殷之服民以養生之者也無異于周人」とある。
- 64) 『國語・周語上』に，「若是，乃能媚于神而和于民矣，則享祀時至布施優裕也」とある。
- 65) 『礼記・月令』に記す。
- 66) 『孟子・告子下』に記す。
- 67) 「大荒，舍用振窮，開廩同食」とある。
- 68) 「列樹以表道，立鄙食以守路」「国有郊牧、疆有寓望」
- 69) 「至矣哉，直而不倨，曲而不屈，邇而不偪……施而費，取而不貪」とある。
- 70) 『詩經・思齊』に，「惠于宗工」「刑于寡妻，至兄弟，以御于家邦」とある。
- 71) 「我取其陳，食我農人」
- 72) 「存其新而散其旧，以食農人，補不足助不給也」とある。
- 73) 『詩經・大田』に，「彼有不獲穰，此有不斂穧，彼有遺秉，此有滯穗，伊寡婦之利」とある。

(1995年7月8日受理)